



Data

監督・脚本: チェン・スーチェン
 出演: ワン・バオチャン / リウ・ハオラン / 妻夫木聡 / トニー・ジャー / シャン・ユージエン / ロイ・チュウ / 三浦友和 / 長澤まさみ / ジャニス・マン / 鈴木保奈美 / シャオ・ヤン / 浅野忠信 / 染谷将太 / チャン・チュンニン / アンディ・ラウ / チェン・チョーユエン / ソンソ / ヴィクター・マー / リー・ミンシユエ

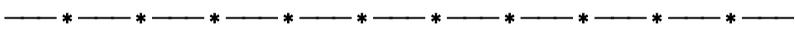
👁️👁️ みどころ

「探偵モノ」にも硬軟があるが、『唐人街探偵』シリーズの“お約束”は、“エンタメ色”と“本格的推理モノ”の両立。ド派手な服装を含め、導入部の東京ミッション入りでは、一瞬これはダメだと思ったが、いやいや。

密室殺人事件の真相究明、真犯人の発見は探偵たちの究極のテーマ。三浦友和扮するヤクザの親分は、ホントにこんな単純な殺人を？ 10億円の報酬も魅力だが、「唐人街探偵」にはそれ以上にプライドが！

東京ミッションのためには、東京ロケが不可欠。『君よ憤怒の河を渉れ』（76年）や『マンハント（追捕）』（17年）以上にそれを楽しみながら、探偵たちの証拠集めのサマに注目したい。「法廷モノ」としてはナンセンス！しかし「探偵モノ」なら・・・。

クライマックスで解明されていく、あっと驚く密室殺人事件のトリックをじっくり楽しみたい。これなら10億円の報酬にも納得！



■□■唐人街探偵とは？CRIMASTERとは？■□■

刑事は国家権力をバックとして、予算の範囲内とはいえ国家の金を使うことができるから、地域を多方面にまたぐ広域捜査や、大量の警察官を動員する大規模捜査が可能。刑事の中には、アメリカのダーティーハリーのような“はみ出し刑事”もいるが、その多くは『砂の器』（74年）（『シネマ43』343頁）で丹波哲郎と森田健作が演じた2人の刑事に代表されるような、勤勉で足で稼ぐ捜査が得意なキャラが多い。

それに対して、探偵は、あえて私立探偵というまでもなく、個人経営の民間人だから、英国のシャーロックホームズや日本の明智小五郎、金田一耕助のような有名な探偵でも、依頼主あつての存在だし、依頼主からお金をもらうことによって経営を成り立たせなければ

ばならない。シャーロックホームズや明智小五郎は、ともに優秀な助手を持っていたこともあって経営は順調だったようだが、一匹狼(?)の金田一耕助はどちらかというと言え探偵(?)。

また、弁護士は探偵と同じように自由業の民間人だが、「法曹一元」を前提とした司法試験は国家試験だから、司法試験に合格し、司法修習を終えれば検事、裁判官と同等になる。しかし、探偵は何の資格もないから、ホンマ物とインチキ物の区別は難しい。そんな中、日本では近時、北海道の札幌を、しかもススキノにある1軒のバーを拠点とする大泉洋と松田龍平扮する探偵の凹凸コンビが生まれ、①『探偵はBARにいる』(11年)、『シネマ27』54頁)、②『探偵はBARにいる2 すすきの大交差点』(13年)、『シネマ31』232頁)、③『探偵はBARにいる3』(17年)、『シネマ41』未掲載)という3本の映画が作られた。それと同じように(?)、中国でも、2015年にチンとタンという凹凸コンビの「唐人街探偵」が生まれ、第1作『唐人街探案1』(15年)は大ヒットしたらしい。同作によると、探偵専用の推理アプリで世界中の探偵が利用している「CRIMASTER」なるものがあり、実際の事件の事件解決率によって探偵がランク付けされているらしい。そこには『探偵はBARにいる』の両探偵はランクインされていないが、日本では野田昊(妻木聡)が第3位に、チン・フォン(秦風)(リウ・ハオラン(劉昊然))とタン・レン(唐仁)(ワン・バオチャン(王宝強))のチームが第2位にランキングされているようだ。その第1作はタイのバンコクが舞台だったが、第2作『唐人街探案2』(18年)の舞台はニューヨーク、そして第3作の舞台は『唐人街探偵 東京MISSION』のタイトルどおり、東京だ。

さあ、チンとタンはどんな事件を解決するために日本に乗り込んでくるの?その依頼主は?その報酬は?

■□■「唐人街探偵」の凹凸ぶりは?なぜタイからも探偵が?■□■

勝新太郎と田宮二郎が凹凸コンビを組んだ『悪名』シリーズは面白かったが、『探偵はBARにいる』シリーズの大泉洋・松田龍平の凹凸コンビも面白い。しかして、「唐人街探偵」のボスであるタンと、その甥であるチンの凹凸ぶりは?それは大ヒットした『唐人街探偵』シリーズの1、2を観た人にはおなじみだが、日本ではシリーズ第3作たる本作が初公開だから、本作導入部でのあっと驚くキャラの紹介に注目!

去る7月1日に中国共産党結党100周年を盛大に祝った中国は、政治・経済・軍事の面でも「アメリカに追いつけ!追いつけ!」と躍起になっているが、それは映画の面でも同じ。前者ではまだ追いつくところまでは行っていないが、映画の面では既に質量ともに追いついた感がある。そんな中国映画に比べれば、日本映画は質量とも劣っていることは否めない。主人公を大泉洋と松田龍平の2人だけ、舞台をススキノだけに絞ってしまった『探偵はBARにいる』シリーズに比べると、『唐人街探偵』シリーズは圧倒的に国際化・大規模化が進んでいる。そのため、本作に登場してくる探偵も、タンとチンを東京に迎え

入れる、「CRIMASTER」ランキング3位の野田だけでなく、さらに、タイからジャック・ジャー（トニー・ジャー）探偵も東京にやって来るから、この元ムエタイ王者にも注目！

本来なら、ここで「CRIMASTER」にランキングされているそんな探偵諸氏の自己紹介をすべきかもしれないが、本作冒頭では彼らの自己紹介のためのド派手な、いかにも「これぞ今の中国」と思わせるアクションが用意されているので、それをしっかり鑑賞してもらいたい。ちなみに、私が観たのは「吹き替え版」だが、野田役の妻夫木聡は流暢な中国語をしゃべるそうだから、次回には字幕版を観て、彼の“漢語水平”をしっかりと確認したい。

本作導入部のアクション（バカ騒ぎ？）やチンとタンの両探偵をはじめ、野田やジャックの服装を見て、何とバカバカしいと思う日本人の年配者がいるかもしれないが、それはそれと割り切って観ていくと、本作のすばらしさもわかってくると思うので、決して途中でブチギレないように。

■東京ミッションはインポッシブル？報酬10億円なら？■

ハリウッドを代表する俳優トム・クルーズは若い時から『ミッション：インポッシブル』（96年）をはじめとする多くの“インポッシブル”な“ミッション”に取り組んできたが、本作で東京にやってきたチンとタンの「唐人街探偵」に日本の野田探偵から協力依頼されるのは、東南アジアのマフィア「東南アジア商会」会長スーチャーウェイの密室殺人事件。犯人として起訴されたヤクザの「黒龍会」組長・渡辺勝（三浦友和）の冤罪証明だ。「黒龍会」の本拠地で、風呂に浸かりながら渡辺から提示されたその報酬は、何と10億円。タンはその金額だけでウハウハだが、冷静で頭脳明晰な探偵チンは、あくまで“真実探求”という探偵本来の業務に徹していたから、立派なもの。

本作の肝は密室殺人事件の究明だから、まずは現場の確認が大切。それは“シャーロックホームズモノ”、“明智小五郎モノ”、“金田一耕助モノ”、さらにアガサ・クリスティーの“ミステリー小説モノ”でも同じだ。密室殺人事件の解明は推理小説の究極のテーマだが、今回私がはじめて知ったのは、ジョン・ディクソン・カーの小説『三つの棺』。その第17章「密室の講義」によると、密室殺人事件のトリックは①殺人ではなく偶発的な事故、②室内の仕掛けによる殺人、③動物や植物を使った殺人、等の13種類に分類されるそうだが、今回の事件はそのどれに当てはまるの？

『唐人街探偵』シリーズの“面白いお約束事”は、アクションコメディと本格ミステリーを両立させたエンタメ作品にすること。その“前者”は、本作導入部でド派手に見せてくれるが、後者もタンとチンが現場検証を行うシークエンスから本格的展開の雰囲気を見せてくる。しかし、現場検証では、事件の夜に渡辺がスーチャーウェイを打撲したことを示す花瓶を発見。さらに、事件直後にスーチャーウェイを病院に運んだ秘書の小林杏奈（長澤まさみ）は、渡辺からセクハラ行為を受けるなど、その夜の渡辺のマナーが最低だったと語ったそうだから、これではスーチャーウェイ殺害の犯人はやはり小林に間違いな

し！？そうすると、渡辺の無罪を立証してくれという「東京MISSION」の達成は、やっぱりインポッシブル？さらに、そこに警視正・田中直己（浅野忠信）が登場し、花瓶を警察の手柄として取り上げてしまったうえ、探偵らは捜査の妨害をしないよう警告を受けたから、なおさら「東京MISSION」はインポッシブル？

■□■現場検証の次は死体検分！コント風展開だが、実は？■□■

私は最近、1980年代の超人気番組だった、ザ・ドリフターズの『8時だよ！全員集合』の再放送をよく観ているが、これは今でもメチャ面白い！おじさんたちが演じるバカバカしいコントの数々は、先が見えていても笑えるし、先が見えていない、あっと驚くものなら、なおさら笑えるから、思わず見入ってしまう。

しかして、本作のスクリーン上ではかなり手の込んだ現場検証（？）の次には、スーチャーウェイの死体検分を巡って、『8時だよ！全員集合』とよく似た雰囲気のコント（？）が繰り広げられていくので、それに注目！思わずそれに笑い転がっていると、“本格的推理モノ”でもある本作では、スーチャーウェイの死体を詳細に分析したタンと野田が不自然な傷跡や奇妙な針穴を見つけていくので、さらにそれにも注目したい。

これらの新発見、新証拠は、後に見る渡辺の裁判で如何なる役割を？

■□■キーウーマン小林杏奈の供述は？その失踪は？■□■

2000年の第5回「東宝シンデレラ」グランプリを受賞してデビューした長澤まさみは、『世界の中心で、愛をさけぶ』（04年）（『シネマ4』122頁）で第28回日本アカデミー賞最優秀助演女優賞・話題賞を受賞。その後も順調な活躍を続け、近時は木村拓哉と共演した『マスカレード・ホテル』（19年）（『シネマ43』251頁）で大活躍を見せている。アジアの大スターを多数共演させた本作に、“紅一点”の小林杏奈役として登場させてもらえたのは超ラッキー。本格的人情モノや本格的歴史モノなら他の適役女優が何人もいるが、大スターたちの共演で圧倒する本作では、まさに彼女はピッタリの人選だ。

そう思っていたが、スーチャーウェイの秘書としてカッコよく登場してきた小林は、渡辺からちょっとしたセクハラ（？）を受けて騒ぐレベルのチョイ役？そんな期待外れ感もあったが、小林は殺人事件の現場（＝密室）へ最初に突入し、最初に被害者の身体に触れた重要参考人だから、現場検証と死体検分に続いてタンたちが彼女の供述を聞こうとしたのは当然。ところが、彼女のマンションに入っていくと、小林は何者かに誘拐された後だったから、アレレ……。

■□■物語も脱線！？東京ミッションも脱線！？だが面白い！■□■

マンションの防犯カメラから、小林を誘拐したのは強盗殺人で指名手配中の村田昭（染谷将太）であることが判明。ところが、村田は4人の探偵に対して、身代金と3つの難題を要求したため、本作中盤の物語は、4人の探偵たちが東京中を駆け巡らされるはめになるので、さあ、お立合い！そのため、本作中盤は、物語も脱線なら、東京ミッションも脱線していくことに……。

ちなみに、コロナを巡って7月12日から東京には4度目の緊急事態宣言が“発出”された。人流抑制はままならないのが実情だが、人の流れを観察するについて、いつも登場するのが渋谷のスクランブル交差点。かつて、佐藤純彌監督の『君よ憤怒の河を流れ』（76年）では、新宿駅西口で待ち合わせた高倉健扮する杜丘冬人を馬上に捨てた、中野良子扮する遠波真由美が、1968年の“新宿騒乱事件”を彷彿させる大騒動（＝馬での大疾走）を展開していく姿にビックリさせられた（『シネマ18』100頁）が、あの撮影はどうやって実現したの？また、同作をリメイクした『マンハント（追捕）』（17年）では、更に見どころいっぱい、大阪各地のロケの中でジョン・ウー監督流アクションを大いに楽しむことができた（『シネマ44』127頁）が、あの撮影は？

常に膨大な人数が行き交っている渋谷スクランブル交差点での撮影は不可能だから、なんと本作では（資金力に任せて）、撮影用のオープンセットをわざわざ作ったらしい。オープンセットをネタにした観光客の呼び込みは、とりわけ中国からの来日観光客の増大で広がったが、足利市は、本作と『サイレント・トーキョー』（20年）（『シネマ48』未掲載）、『今際の国のアリス』（20年）の3作で活用するため、足利競馬場跡地の1.5ヘクタールの土地に、渋谷スクランブル交差点を再現した映画撮影用のオープンセットを建設したそう。『東京 MISSION』とサブタイトルが付けられた本作では、それをはじめとする東京のさまざまなロケ地での撮影はもとより、その他の各地でも大規模なロケでの撮影が敢行されているから、それらに注目し、大いに楽しみたい。

村田から命じられた3つの難題を巡って、タン、チン、野田、ジャックの4人の探偵は、秋葉原、新宿・歌舞伎町等を駆け巡らされることになるが、これは一体ナニ？また、村田から命じられたゲームの勝者は一体誰に？そんなエンタメ色を満開させながら、他方で本格的推理モノの両立を目指す本作は、ここでも、彼らが巡った場所を線でつなぐと“Q”の文字となることから、人質交換の場所は首都圏外郭放水路の「龍Q館」になるだろうと推理する見事な展開（？）になっていく。そして、実際に「龍Q館」に現れた村田は、あらゆる手段でチンを苛立たせようとしていたが、ちょうどその時に、田中たちが到着し、村田を立坑の中に突き落とすチンの姿を目撃することに。そのため、小林は救出されたものの、チンが殺人容疑で逮捕されてしまうから、アレレ……。

『空海一KU-KAIー美しき王妃の謎（妖猫伝）』（17年）（『シネマ44』122頁）では若き日の空海を、NHK大河ドラマ『麒麟（きりん）がくる』では信長役を演じた染谷将太が、本作ではかなり異色キャラの村田役を演じているので、それにも注目！

■□■Qの登場！思わずQアノンを連想！■□■

「CRIMASTER」で、事件解決率100%、常に1位に君臨する謎の存在とされているのが“Q”。本作中盤、村田に命じられるまま4人の探偵が競って展開した“東京ミッション”は、結局タンの勝利に終わったが、「龍Q館」では小林は助け出されたものの、村田は死亡し、チンは殺人罪で逮捕されてしまったから、アレレ。これから本作はどんな展開

になっていくの？そう思っていると、本作はその後、“Q”の存在と役割が少しずつ提示されていき、トム・ハンクス主演の『ダ・ヴィンチ・コード』（06年）（『シネマ11』26頁）や『天使と悪魔』（09年）（『シネマ23』10頁）のような雰囲気は漂わせていく（？）ので、それに注目！

ちなみに、2019年11月のアメリカ大統領選挙をめぐるのは、「Qアノン」の存在と、その陰謀説が注目された。アメリカの“極右勢力”によって構成されている「Qアノン」（ないし単に「Q」）の陰謀論では、世界規模の児童売春組織を運営している悪魔崇拝者・小児性愛者・人肉嗜食者の秘密結社が存在し、ドナルド・トランプ前大統領はその秘密結社と戦っている英雄であり、神に遣わされた救世主として信奉者に崇拝されているそうだ。それに対して、本作で第1位にランクインされている“Q”とは一体何？どんな組織？それを操っているのは誰？それは、あなた自身の目でしっかりと”

■□■チンは孤立？タイや中国での仲間たちの調査は？■□■

「龍Q館」の中で拘束され、人質にされている小林を救出するべく、チンが乗り込んでいく姿はカッコいい。ところが、そこで挑発するかのような村田を衆人監視の下で突き落とししてしまったのは、チンのミス？それとも、ひょっとしてすべて村田の策略？一方ではそんな疑問も広がっていくが、チンは村田殺害の実行犯として逮捕され、拘留されてしまったから、そうなるも渡辺の無罪（冤罪）を証明するための報酬10億円の探偵業務はアウト・・・？誰もがそう思うはずだが、チンのパートナーのタンは、当然その後も懸命の調査を続けていたし、意外や意外、日本の野田も、タイのジャックも、タイや中国で調査を続けていたから、探偵同士の友情は立派なものだ。

中国残留孤児をテーマにした山崎豊子の小説『大地の子』とそのテレビドラマは大きな感動を呼んだが、日本帝国主義の中国東北部（満州）への侵略とその後の日本敗戦の中で生まれた“中国残留孤児”というテーマは、同作のみならず、さまざまな人の間で、さまざまな形で存在したのは当然だ。もっとも、本作はそんなシリアスなテーマを扱ったものではなく、エンタメ大作だが・・・。

他方、日本のヤクザ社会は日本人だけで構成されていたから、1960年～70年代のヤクザ映画に見る抗争は、日本人ヤクザ同士のものだった。しかし、中国マフィアをはじめとする海外からのマフィアが新宿歌舞伎町を中心に乗り組んでくると、『新宿インシデント』（09年）に代表されるように、新宿でのヤクザ抗争も国際化していくことがわかる（『シネマ34』未掲載）。本作でも、渡辺率いる「黒龍会」は純日本風のヤクザだが、そんな「黒龍会」が新中華街の開発権を巡って対立したのは東南アジアのマフィア「東南アジア商会」だったから、その抗争は国際的だ。しかし、ボス同士2人だけの密室での頂上会談で、いきなり殺人事件が起きたのは一体なぜ？いやしくも、多数の子分を率いるヤクザ組織の頂点に立つボスが、そんな軽はずみなことをするのか？また、小林はたしかに有能な美人秘書のようだが、なぜ日本人の彼女がスーチャーウェイの秘書をしているの？

警察に拘留されているチンを尻目に、タン、野田、ジャックたちの探偵業務は多方面かつ精緻に展開していったようだが、さて、その成果は？

■□■法廷モノならナンセンス！しかし探偵モノならグッド！■□■

「法廷モノ」の名作は多いが、本作を「法廷モノ」として考えると、本作ラストのクライマックスとなる法廷シークエンスはハチャメチャ！東京地検特捜部の主任検事・川村芳子（妹）役で導入部に登場していたかつてのトレンディ女優・鈴木保奈美が、ここでは渡辺の殺人事件を審理する法廷の裁判長・川村晴子（姉）役として登場し、本作ラストのクライマックスとなる法廷シークエンスを取り仕切るのだから、それに注目！もともと、川村晴子裁判長の役割は、渡辺に対して「最後に何か言いたいことはありますか？」と質問し、「何もありません」と答えられると、「以上で審理を終了し、これから判決を言い渡します」と言うだけ。その後は、法廷に飛び込んできたタンからの「異議あり！」発言を契機に、渡辺の無罪を立証するためのさまざまな新証拠が提出され、それに関する新たな主張が展開されていくので、それに注目！これを見ていると、本作が「法廷モノ」ならハチャメチャで、全くナンセンス！しかし、「探偵モノ」なら・・・？

密室殺人事件の“謎解き”には、推理力とそれを裏付ける証拠の両者が必要だが、少なくとも渡辺がスーチャーウェイを花瓶で殴打したことは間違いない。そこで問題はその動機だが、それを巡っての4人の探偵たちの調査と推理はお見事だ。また、渡辺が小林にセクハラまがいの行為に及んだことも間違いないようだが、ここでも問題はその動機。まさか渡辺が若い女の身体に飢えていたことはないはずだ。ハチャメチャな法廷シーンながら、その中で本作のクライマックスとなる密室殺人事件の“謎解き”をしっかりと鑑賞した私は、ここでその詳細を書くことはできるが、そんなネタバレは厳禁！それは、あなた自身の目でしっかりと！

シャーロックホームズもアガサ・クリスティも、その謎解きは面白いし、明智小五郎も金田一耕助も、その謎解きは面白い。それと比べても、本作に見る国際性豊かな“謎解き”（？）や、ヤクザの親分だって所詮は人の子であることの暴露（？）等を含む「唐人街探偵」達の活躍は十分面白い。彼らの能力の高さにも敬服だ。彼らは、次回（第4作）ではロンドンに飛ぶそうだから、その活躍にも大いに期待したい。

2021（令和3）年7月14日記